

Title	報告二：インターネット時代の世論とジャーナリズム：「メディア論」の視点から
Sub Title	
Author	伊藤, 高史(Ito, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2015
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.88, No.2 (2015. 2) ,p.83- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：平成二六年度慶應法学会シンポジウム インターネット社会における法と政治
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20150228-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

報告二

インターネット時代の世論とジャーナリズム

——「メディア論」の視点から——

創価大学教授 伊藤 高史

一 はじめに

創価大学の伊藤高史でございます。「インターネット時代の世論とジャーナリズム」というテーマで報告をさせていただきます。

私が今日の「インターネット時代の世論とジャーナリズム」という題目をいただきまして、まず漠然と考えたことからお話しさせていただきます。ひとつは「ネット世論」と言われるものです。「ネット世論」という言葉が含意しているのは、「ネット」の中で流通する「世論」が、他の場所で観察される「世論」と違うということだと思います。「他の場所」とは伝統的なマスメディアであるテレビや新聞のことだと考えられます。言ってみれば、「世論」の分裂が観測されて

いる、ということでしょう。「ネット世論」という言葉はしばしば「ネット右翼」という言葉、過激な表現との関連で言及されます。インターネットが一般的なものとなったとき、このように世論が分裂しているということはどう考えるべきなのか、そして、過激な発言までもが「ネット世論」という言葉で表現されることをどのように考えるべきなのか、インターネット上で観察される世論は、社会にどのような働きをするのか、といったことを疑問に思います。一方で既存のマスメディアに目を向けますと、新聞の論調と報道内容も「分裂」しつつあるようです。「新聞はどれを読んでも同じ」と言われていたものですが、最近は各新聞の個性がかなり強くなっております。もちろん、「論

調」という点ではインターネットが普及する以前から各新聞は大きく異なっていました。しかし、一面や社会面などの、主要なページで報じられるトピックについては、かなりの程度的一致があったと思います。しかし近年、一面や社会面の、従来はストレートニュースを中心に構成されていた紙面においても、ひとつの記事が長くなる傾向があります。それに合わせて、客観的な情報の伝達というよりも、自分たちの主張にあった出来事をニュースとして伝え、ときには感情的とも言えるような紙面づくりがなされることもありま

す。東日本大震災の後処理をめぐっては、一部の新聞はかなり露骨に「菅（直人首相＝当時）降ろし」とも言える方向で紙面をつくっていたと思います。特定秘密保護法や現在の集団的自衛権をめぐる紙面づくりを見ても、そのような印象があります。

「世論」についてはこれまで、大変数多くの議論がなされてきました。岡田直之は世論観念の歴史の変遷を辿った論文で、二〇世紀の初頭に、世論をめぐる議論において、「大衆論的展開」があったと指摘しています。⁽¹⁾このころ、タルド、クーリーさらにその後、リップマン、ミルズ、などによって、世論観念は様々

に論じられてきました。⁽²⁾そこでは「世論」の担い手がエリートか大衆か、理性的な意見なのか、あるいは非理性的な人気のようなものなのか、個人個人の意見の集積なのか、あるいはひとつのまとまりをもった統一体なのか、さらに、いかにして操作され得るものなのか、などといった点が議論されてきたことと思います。これらの論者の議論の基礎にあったのは、マスメディアが普及して社会が大衆化の方向に向かう中で、「世論」の概念や機能が変化しつつある、という認識であったと思います。私も同様に、インターネットが普及し、マスメディア時代からインターネット時代へと移り変わりつつある今日、世論の概念や機能は再び変化しつつあるとの問題意識をもって本報告をまとめたと思います。

本報告では、世論を表象する主要なメディアがマスメディアからインターネットへと変わりつつある中で、世論とジャーナリズムの関係がいかに変わりつつあるのか、世論の機能がいかに変わりつつあるのか、を主要な論点とします。この場合のジャーナリズムとは、既存のマスメディアが行う報道活動を指します。もちろんかつてのマスメディアも今日ではインターネット

で情報を発信しておりますが、基本的にはマスメディアと同じような情報発信の仕方をしておりますので、ここではジャーナリズムⅡマスメディアと考えます。

このテーマを考えるにあたり、本報告では「メディア論」を参照したいと思います。新聞やテレビの報道内容などをあれこれ論じること、「メディア論」と呼ばれることがあります。ここでの「メディア論」は狭い意味の「メディア論」を指します。つまり、メディアのあり方によって社会のあり方が強く規定される、とする考え方です。マクルーハンの「メディアはメッセージである」という言葉が意味するのは、メディアが流すメッセージとは無関係に、あるメディアが支配的になった社会は、皆、ある一定の方向に変化していく、という主張だと理解できます³⁾。極めて単純化して述べれば、新聞という、情報を画一的に大量に一方方向に伝達するメディアが普及した社会は、一様に、画一化の方向に変化していく、とするような考え方です。この意味で、「メディア論」とはある種の「メディア決定論」に立つ立場だと理解できます。社会が、人と人とのコミュニケーションによって成り立つ、と考えるならば、人と人とのコミュニケーションを媒介

するメディアが社会のあり方に対して決定的な影響を与えると考えられることは、ひとつの考え方としてはあり得ると思います。コミュニケーション技術の発展が我々の日常生活に大きな影響を及ぼし、「情報社会」の到来を誰もが実感する今日においては、メディア論的な情報社会論が新たな注目を集めております。特に、ドイツにおいて、ニクラス・ルーマンのシステム論などの影響を受けつつ、哲学的な独自の「メディア論」が発展しました⁴⁾。

ただし、メディア論といっても様々な論者がおります。今回は時間も限られておりますので、言及するメディア論者は、次の二人に絞りたいと思います。本報告で特に参照するのは、ベンヤミンなどの研究で知られるノルベルト・ポルトと、メディア論についての哲学的な検討から情報社会論を展開している大黒岳彦の業績です。いずれも社会学者というよりは哲学者で、ルーマンの影響を強く受けております。ポルトは二〇一二年に、大黒は二〇〇六年に、ルーマンの解説や解釈を集中的に行った著書を刊行しております⁵⁾。本来は両者がルーマンをいかに理解しているのか、といった点を詳しく述べるべきでしょうが、時間の関係でそう

したことを行うことはできません。ルーマンについて詳しい先生からはお叱りを受けるかもしれませんが、二人の言説とルーマンとの関係についてはここでは触れないことにいたします。

二 マスメディア時代の世論とジャーナリズム

「世論」の定義については例えば大石裕は近著『メディアの中の政治』で、「一般市民の意見の集合体、すなわち社会的な出来事や問題・争点に関する一般市民の意見の集合体、それが世論と呼ばれている」と述べております。有斐閣の『社会学小辞典』では、次のような説明があります。

世論という語は一般に政治との関連で用いられ、理念的には「主権者人民の意志」、現実的には「政策決定に対する被治者からのインパクト」と考えられている。社会学ないし社会心理学では、政治に限らず「社会体系内に発生した、解決を必要とする問題(issue)をめぐる、成員が表明する集合的見解」をいう。⁽⁷⁾

世論は何か、ということよりも、世論という概念が社会的にいかに機能しているのかを見れば、世論を政治過程との関連で定義するのが適当かと思えます。岡田はピエール・ブルデューの世論についての議論を説明する中で、「多言するまでもなく、現代政治において世論の概念はなによりも政治支配や政治行為を正当化するための中枢的政治シンボルとして利用され機能しているということにはかならない」と指摘しています。⁽⁸⁾ 世論は基本的に、政治的あるいは社会的な争点において、社会を動かす地位にいる個人やシステムを動かすための重要な要因であり、道具であったと言えると思います。

ボルツは、「ヨーゼフ・A・シウムペーターがすでに六〇年前に明確に述べたように、民主主義は政治家による支配である。そして、この職業政治家は政治的舞台の演出の名人として理解されなければならない。人民の意志や世論は政治過程の駆動力ではなく、政治過程の産物なのである」⁽⁹⁾と述べています。この指摘が意味するのは、少数のエリートによる統治を民主化するという、ある種の矛盾した要請から「世論」が生み出されるのである、ということだろうと思えます。

「世論」は、もともと社会の中に実態として存在するものではなく、矛盾をはらんだ民主主義的政治過程の中からある意見が「世論」として構築され、認知される。ボルツの主張はこのようなものだと考えられます。このように考えるときに、次に問題になるのは、「世論」はいかにして「世論」として構築されるか、という点です。

世論は民主主義社会においては、①選挙結果、②マスメディア・報道機関、③世論調査、④社会運動——などの形をとって表明され、顕在化すると考えられてきました⁽¹⁰⁾。

これに対して、ボルツと大黒はともに、マスメディアの外部に世論が存在しないかのような議論を展開しています。

まずはボルツによる世論の機能の説明をご紹介します。ボルツはノエル・ノイマンの沈黙の螺旋仮説を援用して、世論の機能を説明します。大衆民主主義社会においては、人々は孤立を恐れるために、自らを少数派と認識する人々は沈黙する。人々は、世論を通じて、「他者が世界をいかに観察しているのかを観察する」。このため、コミュニケーションを通じて、沈黙

がつくられ、大衆民主主義社会は「世論の専制」に陥る⁽¹¹⁾。このようにボルツは言います。

ボルツはさらに、世論にテーマという形式を与え、そのテーマを捉える認識枠組みを与えるものがマスメディアだと述べております。マスコミュニケーション研究との関連で言えば、これはマスメディアの議題設定機能にあたるものです。マスメディアが社会に特定のテーマを行き渡らせることで、コミュニケーションは持続していく。マスメディアがこのような機能を果たす上で前提となっていたのが、常に報道機関同士で報道内容を参照しあつて、同じようなテーマを報道するという慣行であったとボルツは述べます。ボルツは「マスメディアは起こっていることを報じるのではなく、他のマスメディアが重要だと考えていることを報じるのだ。マスメディアは第一に、世界にはではなく、自らに関係づけられているのだ」とも述べています⁽¹²⁾。

ボルツはさらに次のように述べて、世論はマスメディアの中で生産されることを指摘します。「政治家は世界を観察する代わりに、彼らがマスメディアにいかんにか観察されているのかを観察する⁽¹³⁾」。「あらゆる民主主義は多数の者の参加を組織化する。このことは、民

主義は政治家の支配にほかならないために、政治家の決定に対する関心を前提としている。そしてこのことは再び、意見が存在する、ということ为前提とする。しかしその意見はまず、マスメディアによって生産されるのである。マスメディアは、意見という商品に対する需要を安定化させるのである⁽¹⁴⁾。

このような見解は、大黒も共有しています。大黒は次のように述べています。

「世論」はマスメディアとともに生まれ、マスメディアとともにその重要性を増してきた、いわばマスメディアの「申し子」である。マスメディアが成立する以前の時代に「世論」は存在しない。なぜなら、「世論」とはマスメディアが創り出したウォラス・ポット^{ワラス・ポット}の「大社会」において、その構成員全体が「公衆」(the Public) というアノニマスな人格に仕立て上げられた上で、その仮想的人格が抱いているとされる「見解」(public opinion) だからである。もちろん、その「公衆の見解」なるものを実際に組み立て公表するのは、ほかでもない「マスメディア」である⁽¹⁵⁾。

上記のような言明は、マスメディアが世論を歪めているとか、操作しているとかの問題ではありません。そのような考え方は、世論がマスメディアの外部に、実態として存在しているということを前提とした議論となるでしょう。選挙、世論調査、社会運動はマスメディアに報じられて、その中で世論として認知されます。選挙、世論調査、社会運動は世論を推知させる重要な要素です。そしてそれらをまとめて世論としての形式を与えるのがマスメディアであったという理解であると思います。

このことは、マスメディアが自由に世論を生産できる、ということでもありません。政治家や官僚、あるいは社会運動体は世論を操作しようとするでしょう。マスメディアはそうした勢力から無関係に世論を構築できるわけではないのは当たり前です。しかし、マスメディア時代において、人々が世論を世論として認知できるのはもっぱらマスメディアを通じてでしかなかった、ということをポルツと大黒は指摘しているのだと思います。

三 インターネット時代の世論とジャーナリズム

これまででは、マスメディア時代の世論とジャーナリズムの話です。インターネットが普及した今日にあって、世論の機能において、マスメディア時代とインターネット時代との間にいかなる断絶があるのか。これが今回の報告の本論です。

マスメディア時代とインターネット時代の違いは、大黒が図式的にまとめておりますので、まずはそちらをご紹介しますと思います。

まず、マスメディアとインターネットのコミュニケーション・パターンの違いを、大黒は次のようにまとめています。マスメディアの特徴は、①「情報」の蒐集における一極集中、②加工における一元的管理、③頒布における中心から周辺の同報一斉送信——にあると言います。そして大黒は、このようなコミュニケーション・パターンを「放—送」と呼びます。このような「放—送」メディアは、情報拡散が定期的であることで社会にリズムを生み出し時間的秩序を与え、均一な受け手としての大衆を生み出し、一つの市場をつくり、そこでは情報は商品としての性格を帯びる、などの特徴を持っています。これに対してインター

ネットという技術の登場と普及とともにあらたに生み出されたコミュニケーション・パターンは「ネット—ワーク」と呼ばれます。「ネット—ワーク」は、①個人が「情報」フローを介して次々に連鎖し接続されていくことで形作られる二次元的で水平的なコミュニケーション・パターンを基本にし、②情報フローの連鎖と接続とが無際限であることによって常に動的な生成のダイナミズムの相にある、③全体を束ねる「一極」が不在である——などの特徴を持っています。そして今日の情報社会は、(マスメディア)パラダイムと(ネットワークメディア)パラダイムが拮抗しつつ並存しており、我々は現在、この「二重化された社会」を生きているのだと言います。⁽¹⁷⁾

「世論」との関係で、この二重化された社会はどのような現象を引き起こしているかについて、大黒は次のように述べます。従来は、マスメディアが世論を組み立ててきました。しかし今日では、(ネットワークメディア)によって提供されるもう一つの「世論」が急速に社会に流通し、マスメディアの世論を凌駕しつつあります。マスメディアが頻繁に世論調査を行うのは、「世論調査」の「威」を借りて「客観性」を装わ

ねばならないほどにマスメディアの影響力と信頼性は低下していると断ずるほかない⁽¹⁸⁾と大黒は言います。世論もマスメディアの世論と、ネットワークメディアの世論に二重化されたと言うのです。

大黒はマスメディアの世論を「統論」、ネットワークメディアの世論を「網論」と呼んでいます。インターネット時代にあつては、マスメディアが映し出す「統論」は、「網論」の一部を形成するにすぎません。「統論」が「網論」と張り合い競合しようとしたその瞬間、それは「網論」を構成する一つの断片的見解に格下げされ、「網論」に組み込まれてしまう⁽¹⁹⁾、と大黒は述べるのです。

マスメディア時代には「統論」を構成できなかつた情報の受け手としての「大衆」は、「網論」においては、情報の送り手と受け手とが区別されない「群衆」^{クラウド}として登場します。「世論」が「統論」と「網論」に二重化したのに応じて、その担い手もまた「大衆」^{マッス}と「群衆」^{クラウド}とに二重化した⁽²⁰⁾のです。

上記のようなマスメディア時代とインターネット時代の対比、それぞれのコミュニケーション・パターンの対比は、概ね常識的なものだろうと思います。

ただここで、一つの点において、大黒に異論を唱えておきたいと思えます。大黒はマスメディアの「世論調査」に関連して、マスメディアの「世論調査」の対象となつている「世論」とは、「統論」ではなく「網論」^{クラウド}の方であると指摘しています。そして、「網論」^{クラウド}によつて産み出される「網論」はその実態が「取材」によつては見えない。マスメディアの顧客層はすでに「大衆」^{マッス}から「群衆」^{クラウド}にシフトしている。……だからこそマスメディアは「群衆」^{クラウド}の動向を常に気に懸け、時々刻々変容する「網論」に探り針を入れるべく、常軌を逸した頻度で「世論調査」を行わざるを得ない⁽²¹⁾と指摘します。しかし、マスメディアが世論調査を行うとき、マスメディアは相変わらず、調査対象を大衆として捉えていると考えるべきである⁽²²⁾と思います。

というのも、「世論調査」が表象しようとする「世論」というものは、ひとりひとりの人が全く平等にカウントされることによつて表象されるもので、それはまさしく均質化された「大衆」として受け手(あるいは社会の構成員)を捉えるマスメディアの見方に重なるからです。マスメディアは世論調査を行うとき、まさしくひとりひとりには個性も力関係もない、個々バ

ラバラの「大衆」として調査対象を捉えていると言え
ると思います。そうした大衆は、マスメディアが設定
したアジェンダについて意見を言うことはできても、
アジェンダそのものを設定することはできません。世
論調査によって捉えられる世論は、むしろ「ネット世
論」とは対極的なものであろうと考えます。恐らくは、
インターネットで人々が認知する世論とは、そうした
「ひとりひとりの人が全く平等である」というフィク
ションに基づいたものではないと考えられます。

このことを考えるにあたり、再び、ボルツの議論を
参照したいと思います。

ボルツは「人間は世界コミュニケーションのボトル
ネックとなっている。情報消費システムとしての人間
は、情報を同時並行的に処理できないからだ⁽²²⁾」と述べ、
情報過多のネットワーク社会において最も希少なものは
「注意（関心）」であると指摘します。「現代社会の
中心の問題は、すべての資源のうちでもっとも希少な
もの、すなわち注意（関心）のマネジメントである⁽²³⁾」
と述べています。かつては、情報の送り手は、マスメ
ディアとそれ以外といった形で階層化されていました
インターネットはそうした階層化を破壊するわけです

が、それに代わる新たな階層化が登場しております。
インターネット上には多くのブログがありますが、そ
の中で読まれているのはごくわずかです。「このため、
そのようなネットワークにおいて、代表的、すなわち
平均的な参加者を探すことには何の意味もないのであ
る⁽²⁴⁾」。こうボルツは主張します。

このようなボルツの指摘は、冒頭にあげたような日
本での世論とジャーナリズムの現状を考える上で示唆
に富みます。情報があふれるインターネットにおいて、
注意（関心）を集めることが重要であるという指摘は
その通りでしょう。そして、注意（関心）を集めるた
めには平均的であつてはいけません。ここでは、情報
の「強度」とでも言うべきものが重要になります。そ
して、匿名である限りにおいて、「沈黙の螺旋」仮説
が述べるような孤立することを恐れる必要もありません。
相互に監視し合つて、いわゆる「特オチ」がない
ことに細心の注意を払つていた従来の新聞が世の平均
を示そうとしていたのに対して、インターネットでは
注意を集めるだけの「強度」を持った情報が価値を持
つため、平均ではなく過激な方向や、細部へと、議論
は誘導されやすくなります。

インターネットによって、現代社会は一元的な「世論」が存在し、その「世論」が、少数派に沈黙を強いるような世界ではなくなりつつあると言えるでしょう。むしろ人目を引くような「強度」を持った発言や意見などが、一定の支持を集め、そこでひとつのグループをつくっていく、そうした傾向が顕著になっていく。その一方で、かつて世論を独占していたマスメディアは、インターネットにおいて意見を述べたり、特定のテーマを提示したりする数多いプレーヤーのひとつになっていく。ひとつのプレーヤーとしてのマスメディアも、それぞれ「強度」のある情報を競い合うようになる。今回検討したメディア論の立場からは、そのようなことが考えられます。

このようなインターネット社会の特性は、ヘイトスピーチを繰り出す排外主義的な運動との関連で最も明瞭に観察できます。排外主義運動を研究した社会学者の樋口直人は、従来の社会運動では、具体的な個人の結びつきの強さが運動を持続し、発展させる上での鍵であったのに対して、排外主義運動にはそうした人間の直接的な紐帯はなく、その代わりに、インターネットでの情報だけで結びつけられていることを実証的に

示しております。樋口はまた、そうしたインターネット情報に触れて実際の運動に参加する人々は、もともとイデオロギー的に、マスメディア上の歴史修正主義的論調に親和的な人であったことを強調しています⁽²⁵⁾。昨今では、「嫌韓本」ブームが起きているとのことで、インターネットが分裂を強化し、従来のマスメディアもその分裂をさらに増幅させています。もちろん、排外主義運動に共感する人々はごく一部ですが、そうした一部の人は、必ずしも少数とは言えず、無視できない存在になっているように思えます。

四 結論

以上、ボルツと大黒のメディア論を参照しつつ、マスメディア時代の世論とインターネット時代の世論との違いについて考えてきました。これまでの検討からは、マスメディア時代の世論が社会を統合する方向に機能するものであったのに対して、インターネット時代における世論は社会を分裂させ、分裂の幅を増幅させる機能を持つものであると、とりあえず結論づけることができます。従来、社会が論ずるべき統一のテーマや意見を独占的に表象したマスメディアは、個々の

報道機関がそれぞれ、インターネットにおける一プレイヤーの位置に甘んじようとしているかにも見えます。あるいは、マスメディア時代の「世論」を社会的に広く共有された意見のようにイメージするならば、そのような「世論」はインターネット社会には存在しない、と言いつ得るのかもしれませんが。もちろん、大黒が述べたように、時代が一気に変わってしまうのではなく、現在はマスメディア時代の要素とインターネット時代の要素が拮抗している状況です。

インターネットが普及して、世論はマスメディア時代の世論とはまったく違う機能を果たしつつある、これが本報告の結論です。ネット世論が注目を集めるようになったことと、新聞が客観性や、相互の類似性を失いつつあることは、インターネットの台頭による、メディアの構造変動から生み出されているということだと思います。

- (1) 岡田直之(二〇〇一)『世論の政治社会学』東京大学出版会：六一
- (2) Tardé, Gabriel ([1901] 2001) *L'Opinion et la Foule*, BookSurge Publishing (= 一九六四、稲葉三千男訳

- 『世論と群衆』未來社) : Cooley, Charles, H (1909) *Social Organization: A Study of the Larger Mind*, Schocken Books (= 一九七〇、大橋幸・菊池美代志訳)『社会組織論：拡大する意識の研究』青木書店) : Lippman, Walter ([1922] 2007) *Public Opinion*, Macmillan (reprinted by NuVision Publications) (= 一九八七、掛川トモ子訳)『世論』上・下、岩波書店) : Mills, C. Wright ([1956] 2000) *The Power Elite*, Oxford Univ. Press (= 一九六九、鶴飼信成・綿貫謙治訳)『パワー・エリート』上・下、東京大学出版会
- (3) McLuhan, Marshall ([1964] 1994) *Understanding Media: The Extensions of Man*, The MIT Press (= 一九八七、栗原裕・河本仲聖訳)『メディア論：人間の拡張の諸相』みすず書房：721 = 722
- (4) 寄川条路編(二〇〇七)『メディア論：現代ドイツにおける知のパラダイム・シフト』御茶の水書房
- (5) Bolz, Norbert (2012) *Ratten im Labyrinth. Niklas Luhmann und die Grenzen der Aufklärung*, Wilhelm Fink : 大黒岳彦(二〇〇六)〈「メディア」の哲学：ルーマン社会システム論の射程と限界〉N T T出版
- (6) 大石裕(二〇一四)『メディアの中の政治』勁草書房：一九

- (7) 「世論」(二〇〇五)濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘
編『社会学小辞典(新版増補版)』有斐閣・六一〇
- (8) 岡田、前出：四
- (9) Bolz, Norbert (2007) *Das ABC der Medien*, Wilhelm Fink: 67
- (10) 大石、前出：二二一―二二五
- (11) Bolz, op.cit.: 64-65
- (12) *ibid.*: 46
- (13) *ibid.*: 68
- (14) *ibid.*: 70
- (15) 大黒岳彦 (二〇一〇) 『情報社会』とは何か? : 〈メディア論〉への前哨』NTT出版：一五七
- (16) 同右：一五一―一五五
- (17) 同右：一五六
- (18) 同右：一五九
- (19) 同右：一六〇
- (20) 同右：一六一
- (21) 同右：一六三―一六四
- (22) Bolz, op.cit.: 22
- (23) *ibid.*: 24
- (24) *ibid.*: 129
- (25) 樋口直人 (二〇一四) 『日本型排外主義：在特
会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版
会
- 〈文献リスト〉
- ・ Bolz, Norbert (2007) *Das ABC der Medien*, Wilhelm Fink
 - ・ Bolz, Norbert (2012) *Ratten im Labyrinth. Niklas Luhmann und die Grenzen der Aufklärung*, Wilhelm Fink
 - ・ Cooley, Charles, H (1909) *Social Organization: A Study of the Larger Mind*, Schocken Books (= 一九七〇、大橋幸・菊池美代志訳『社会組織論：拡大する意識の研究』青木書店)
 - ・ 大黒岳彦 (二〇〇六) 〈メディア〉の哲学：ルーマン社会システム論の射程と限界』NTT出版
 - ・ 大黒岳彦 (二〇一〇) 『情報社会』とは何か? : 〈メディア論〉への前哨』NTT出版
 - ・ 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘 (二〇〇五) 『社会学小辞典(新版増補版)』有斐閣
 - ・ 樋口直人 (二〇一四) 『日本型排外主義：在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会
 - ・ Lippman, Walter (1922) 2007) *Public Opinion*,

Macmillan (reprinted by NuVision Publications) (= 一九八七、掛川トミ子訳『世論』上・下、岩波書店)

- ・ McLuhan, Marshall ([1964] 1994) *Understanding Media: The Extensions of Man*, The MIT Press (= 一九八七、栗原裕・河本仲聖訳『メディア論：人間の拡張の諸相』みすず書房)
- ・ Mills, C. Wright ([1956] 2000) *The Power Elite*, Oxford Univ. Press (= 一九六九、鶴飼信成・綿貫讓治訳『パワー・エリート』上・下、東京大学出版会)
- ・ Noelle-Neumann, Elisabeth (1980) *Die Schweigespirale: öffentliche Meinung-unsere soziale Haut*, R. Piper GmbH & Co. KG (= 一九八八、池田謙一訳『沈黙の螺旋理論：世論形成過程の社会心理学』ブレン出版)
- ・ 大石裕 (二〇一四) 『メディアの中の政治』勁草書房
- ・ 岡田直之 (二〇〇一) 『世論の政治社会学』東京大学出版会
- ・ Tarde, Gabriel ([1901] 2001) *L'Opinion et la Foule*, BookSurge Publishing (= 一九六四、稲葉三十男訳『世論と群衆』未來社)
- ・ 寄川条路編 (二〇〇七) 『メディア論：現代ドイツ